

創価ネーチャー スケッチ

人と自然を繋ぐ、一ページずつ

4 QUALITY
EDUCATION



11 SUSTAINABLE CITIES
AND COMMUNITIES



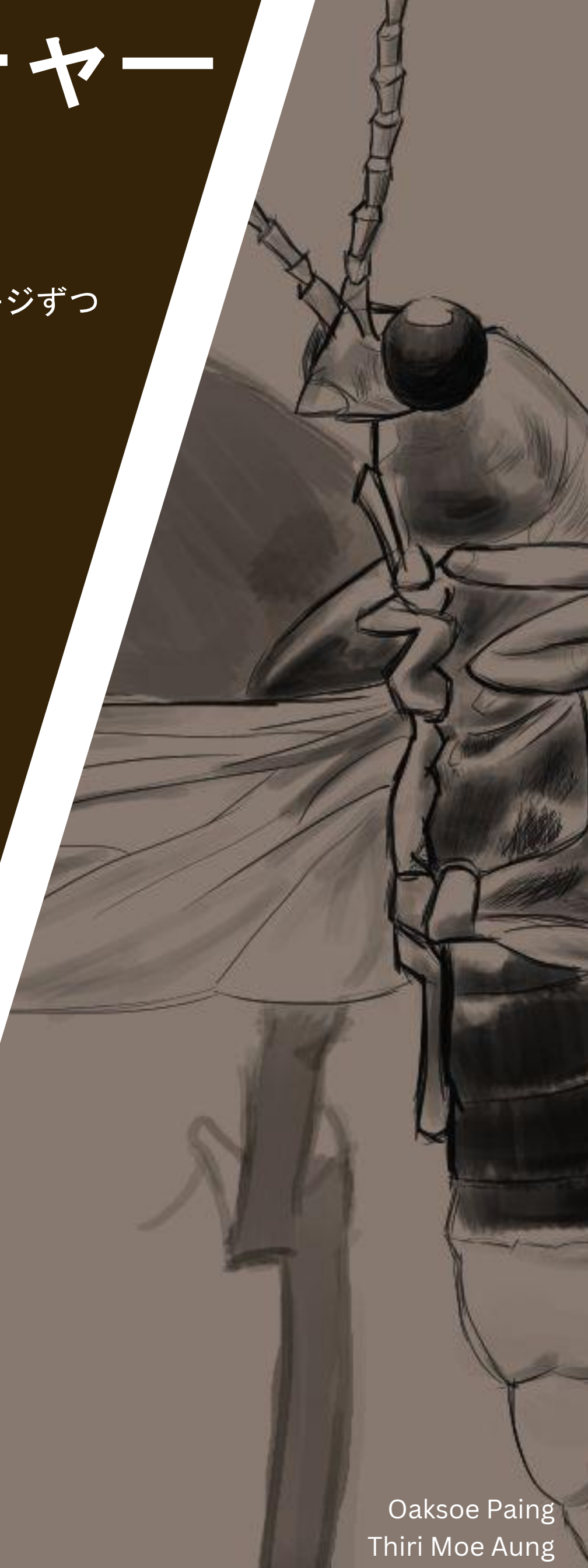
15 LIFE ON
LAND



17 PARTNERSHIPS
FOR THE GOALS



Oaksoe Paing
Thiri Moe Aung





プロジェクトについて

創価大学、そして八王子市は森や小川、草花や野鳥に囲まれ、自然に恵まれています。けれども、忙しい日常のなかで、私たちはその豊かな自然を「風景の一部」として見過ごしてしまいがちです。キャンパスを歩いていても、小鳥の姿や足元の小さな昆虫、季節ごとに変わる木々の色に気づかないまま通り過ぎているのではないのでしょうか。

「創価ネーチャー・スケッチ」は、人々をこの見えているけれど見ていない自然と、もう一度つながり直すためのプロジェクトです。創価大学のキャンパスを歩いて気になった生きものや植物をじっくり観察する。蜘蛛の目の色やトカゲの歩き方を見る、スズメの鳴き声を聞く。コスモスの花びらを数える、樹皮の香りをかいで草の感触をたしかめる。そしてスケッチする。こうした経験をスケッチブックに移し取り、積み重ねることで、小鳥や昆虫、木々や草花を「背景」ではなく、同じ家に住むいのちとして感じてもらい、環境への意識を高め、自然への愛着を育むことを目指します。本プロジェクトは、創立者池田先生が思い描く世界市民の「すべてのいのちの相互連関を見抜く知恵」の特質を身につける場所にもなります

“すべてのいのちの
相互連関を見抜く知恵”

— 池田大作

この取り組みは、体験を通して学ぶことを重視した牧口常三郎の教育思想にもつながります。牧口は、教室の中だけで完結するのではなく、実際の生活世界と結びついた学びを重視しました。自然の中で自ら観察し、考え、感じること——それこそが価値を創造する教育の出発点であると位置づけました。

黒板や教科書だけではなく、自分の目で見て、自分の手で描いて、心で感じる。

その小さな一歩から、「自然と共に生きる」という感覚が始まります。



活動

創価ネーチャー・スケッチは部活として動きます。活動は2週間に一回程度で、一回120分ほど、キャンパスが静かな週末に行われます。本活動は、でも参加し学べるように、創価大学生に限らず一般の方も参加できるオープンアクセス形式で実施します。主な活動は三つの部分に分けてあり、以下の通りです。

① 探す

参加者達を3～4人のグループに分け、30分程度キャンパスを歩きながら気になる生き物や植物を探します。虫眼鏡も用意します。探しやすくするために、昆虫や花、赤いもの、石の下に隠れるもの、5文字以下のものなどのテーマを決めます。安全のために創大生がリードし、お子様は大人に付き合ってください。雨や猛暑の日は、インドアーの形で、家からリンゴやブロッコリ、米粒などを持って来てもらい、それらを観察とスケッチの対象とします。



② スケッチする

気になるものが見つかったら、まずは場所と時間、もし何者かが分かればをノートに書きます。そして、それをよく見て観察し、質問をします。花はどこを向いて咲くのか、この生き物はなぜこの色なのか、自分と向き合っていて何を考えているのか、などなど。グループの人と話し合っても良いでしょう。

そしてスケッチします。スケッチすると、本当に些細なところまで意識しなければならず、そうすることで今まで気づかなかったことが見えてくるからです。なので、うまくできる必要はありません。大事なのは学びです。

創大生が描いたスケッチは部で保管し、参加者のスケッチはスキャンしたうえで原本をお持ち帰りいただけるようにします。



③ ディスカッション

時間が約45分残ったところで、参加者全員は教室に移動します。椅子を円形に並べ、一人ひとりが自分のスケッチを見せながら、感想や気づいた点、疑問に思ったことなどを共有します。たとえば、ナメクジをスケッチした人が「どうやって移動するのか」に気づいたことを話したり、木を描いた人が「片側だけ葉が黄色くなっていて、もう片側はまだ緑のままだった」といった観察を共有したりします。こうした対話の時間を通して、「見る」から「考える」へと学びを深めていきます。このディスカッションは主に創大生の部員がファシリテーターを務めますが、希望する参加者にもその役割を担ってもらえるようにします。



計画・発展・将来目標

創価ネーチャー・スケッチは、単なる単発イベントでは終わりません。本プロジェクトで得られた気づきや学びを基盤として、活動の範囲を広げ、内容を深め、継続的な取り組みへと発展させていくことを目指します。このページでは、キャンパス外への展開や教材づくり、調査・研究活動など、今後の発展の方向性と短期・長期の目標について示します。小さな一歩から始まった学びを、地域や未来へとつなげていくビジョンです。

2027年度春学期

部活を立てる・メンバー募集

4月～5月

パイロットイベント

活動の場を広げる

創価大学キャンパス内だけでなく、八王子市内の公園や里山、水辺など、より多様な生態系へと活動範囲を広げていきます。森林、生け垣、池や小川など異なる環境で観察・スケッチを行うことで、生物多様性の広がりを感じ、自然とのつながりを一層深めることを目指します

夏休み

ハンドブック作成

創価大学キャンパス内だけでなく、八王子市内の公園や里山、水辺など、より多様な生態系へと活動範囲を広げていきます。森林、生け垣、池や小川など異なる環境で観察・スケッチを行うことで、生物多様性の広がりを感じ、自然とのつながりを一層深めることを目指します

12月

創価キャンパス生物リスト

創価大学キャンパス内で確認できる動植物を、スケッチや写真、観察記録を通して蓄積し、キャンパスの生物相（バイオダイバーシティ）を可視化していきます。学生や地域住民が協力して作り上げる「共有の自然図鑑」として、教育的資源にも発展させることを目標とします。

2027年以降

長期的な環境研究

将来的には、より長期的な視点からの環境研究にもつなげていきます。例えば、創価大学構内の食物網の関係性の解明、桜の開花時期の変化、紅葉の落葉量・バイオマスの測定などです。こうした継続的な観察・記録は、気候変動や季節変動を捉える貴重なデータとなり、学生主体の研究活動へと展開していきます。

SDGsとの関連

創価ネーチャー・スケッチは、自然を題材にしたスケッチ活動にとどまらず、学び・地域・生物多様性・協働という複数のテーマが交わる実践型プロジェクトです。ひとつの活動が、教育、まちづくり、自然環境、パートナーシップなど、複数のSDGsに同時に働きかける点が特徴であり、「SDGsが凝縮された（SDGsの密度が高い）」取り組みと言えます。



丁寧な観察を促し、問いを立てて考える文化を育む学びの空間をつくります。気づいたことを言葉にし、互いに質問を交わすことで思考力や批判的思考、探究心が育まれます。また、大学に通う機会がなかった人や地域の方にも開かれており、世代や立場を越えて学び合う共学の方が生まれます。



地域に暮らす人びとが自然に出会い、年齢・性別・国籍・言語の違いを越えて交流できる場をつくります。日常的な会話や共同活動を通して相互理解が深まり、孤立を防ぎながら助け合いの関係が育まれます。こうした関わりの積み重ねによって、より強く、温かい地域の絆が築かれていきます。



スケッチや観察は、生物多様性を「数字」や「概念」ではなく、具体的な生きものの姿として実感する入り口になります。身近な鳥や昆虫、樹木や草花の存在に気づくことは、自然環境の保全に関心を向ける第一歩です。将来的な種の記録や簡易調査へと発展させることで、地域の生態系を理解し守る基盤づくりにも寄与します。



本プロジェクトは、八王子市の「八王子まるごとキャンパス」の方針とも合致しており、地域ぐるみでの大規模な連携や協働の可能性を広げます。さらに、オープンアクセス型の取り組みであるため、関心のある人であれば誰でも参加することができ、主体的な関わりが深く根づいたパートナーシップの形成につながります。

環境データの発見や更新につながる可能性があります。継続的に観察し、スケッチし、記録を残すことで、身近な生態系の変化に気づく目が養われます。例えば、The University of Washington Citizen Science Initiativeで希少な送粉者が発見され保全につながった事例のように、創価大学のキャンパスでも、新しい発見や見落とされてきた生物への気づきが生まれるかもしれません。そうした気づきは、八王子市の生物多様性データの更新や不足の補完を促し、環境変化を把握する取り組みの後押しにもなります。

観察を通して問いを立て、考え、確かめる経験は、参加者の批判的思考力と探究心を育みます。「なぜこの木だけ葉の色が違うのか」「この生き物はどんな役割を持っているのか」といった疑問を共有し議論することで、ものごとを鵜呑みにせず、自分の頭で考える姿勢が身につきます。こうした力は、学校や職場、家庭などあらゆる場面で生かされ、個々人の学びの質を高める基盤となります。

長所

「生命の相互関係性」の理念を体感的に学ぶ場。観察やスケッチを通して、自分と環境とのつながりを感じ取ることで、理解や関心だけでなく、自然に対する内面的な愛着も育みます。これは、牧口常三郎が行った屋外授業の精神を現代的に引き継ぐものでもあります。

オープンアクセス型で実施することにより、創価大学の学生に限らず、自然に関心のある人なら誰でも参加できます。大学という枠にとらわれない開かれた学びの場をつくることで、高等教育に縁のなかった人にも学びの機会を提供し、「創価教育は社会全体に開かれている」という理念を具体的に形にします。

波及効果

本プロジェクトは、批判的思考の文化を地域に根付かせ、さらに他地域へと波及させやすいモデルとなり得ます。特別な設備や高価な機材を必要とせず、紙と鉛筆さえあれば始められる敷居の低い取り組みであるため、誰もが参加しやすく、自発的な思考・対話の場が自然と広がっていきます。

「自然を観察し、描き、問い、語り合う」というプロセスは、参加者一人ひとりに考える力を育て、それが家庭や学校、地域コミュニティへと連鎖的に波及していきます。こうしたシンプルで再現性の高い枠組みは、他大学や地域社会、さらには海外でも容易に応用可能であり、幅広い場面で批判的思考を尊重する学びの文化を広げていく可能性を秘めています。

世代の違いを越えて人と人が出会う「交流の場」となります。高齢者は若者から活力を得て、若者は高齢者から経験や知恵を学ぶことができます。さらに、高齢者が昔の環境の記憶を語ることで、環境変化の「生き証人」としての役割を果たし、その実感を共有できます。そうした語りは若い世代の心に響き、環境問題への気づきや具体的な行動への動機づけにもつながります。

運営や実施面では、準備や運営に大きな費用を必要としません。スケッチブックと鉛筆があれば始められ、少人数でも実施可能です。小さな規模から無理なく始められる一方で、参加者同士のつながりや学びの広がりを通じて、大きな社会的効果を生み出す可能性を持っています。観察し、問いを立て、考えるプロセスを繰り返すことで、参加者の批判的思考力や探究心を育み、継続的なスケッチや記録の蓄積は、将来的に生物多様性や環境変化に関する研究資料として活用できるでしょう。

本プロジェクトが 思い描く未来

「創価ネーチャー・スケッチ」が目指すのは、単なる生物の記録に留まらない、「生命の尊厳を基調とした地域共同体」の構築です。一枚の紙に引かれる一本の線、そこから始まる自然との対話は、やがて世代や国籍の壁を越え、地球社会を支える「智慧・勇気・慈悲」を備えた地球市民を育む豊かな土壌となります。

私たちが描く未来において、創価大学のキャンパスは単なる教育施設ではなく、地域住民や子どもたちが共に生命の輝きを学び、分かち合う「生きた教育の拠点」へと進化します。八王子の豊かな自然を、単なる「過去から引き継いだ風景」としてだけでなく、データと感性の両面から守り抜き、「未来へ手渡すべき価値」へと捉え直していく試みです。

そもそも、創立者が緑豊かなこの八王子の地にキャンパスを築かれたことには、深い教育的意図が込められていたはずです。それは、自然という「生きた教科書」を通して、生命の尊厳を肌で感じる人を育てるためではないでしょうか。この恵まれた環境を、単なる「景色」として見過ごすことは、そこに眠る無限の学びの機会を「宝の持ち腐れ」にしていることに他なりません。

本プロジェクトは、このキャンパスそのものを教室に変え、創立者が示された「自然から学ぶ心」を現代に具現化する挑戦です。ここで蓄積されるスケッチの一枚一枚が、100年後の未来に向けた希望のアーカイブとなり、持続可能な地球社会を築く確かな一歩となることを確信しています。

私たちは、ペンと好奇心を手に、誰もが「地球の守り手」となれる未来を、ここ八王子の地から共に描き出して参ります。“すべてのいのちの相互連関を見抜く智慧”が実現される世界へ。





2026/1/13
創価大学
文学の池の周辺

葉っぱ

裏面の方が色が
うまい

葉っぱと枝に
毛虫が居る？

毛虫に
食われたのが
何の毛虫？

トゲトゲは
たねのため？

葉っぱを落ちてから
何になる？
どのくらいかかる？

小さな黒い斑点が
たくさんある？

あまり臭くない

二か所に
きれいに切れている

